
The Midnight Phase (Nameless Ghost NML 外伝)

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A f t e r T h e M i d n i g h t P h a s e (N a m e
l e s s G h o s t N M L 外伝)

【Zコード】

N99510

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

Nameless Ghost Route NMLの後日談のようなもの。アリサとすずかのもとにユーノが出向き、二人に隠していたことのあらましを報告するというものです。

彼に関する事では印象に残ることが多すぎる。休日の屋下がり、友人宅のバルコニーでお茶を傾けているときでも、ふと空を見上げたり、少しだけ目を閉じただけでその状況は余りにも鮮明に、余りにも鮮烈に浮かび上がってくる。

少女 アリサ・バーニングはそれを思い浮かべる度に心にわき上がりてくる感情をもてます。

身体の芯を暖かくさせる想い、そして、後悔にも似た冷たい痛みを伴う想い。その二つがない交ぜになって、はき出される吐息には憂いしか込められなくなる。

彼は、自分から大切なものを奪い、そして、同時に大切なものを与えてくれた。とても歓迎できるものではなかつた。

その歯車がずれてしまったのはどの時点だったのだろうかとアリサは今になつても思う。おそらく、決定的になつたのは、彼がなれない仕草で朝の教室で転校の挨拶をしたときだつたのだろう。彼の容姿は同世代といつても余りにも浮世離れしているように思えた。それは、アリサだけでなく、クラスの女子と男子全員を含めても同じだつたのだろう。彼の言葉は透き通つていて、純粹に思えた。

その一声で、クラスからはとても年相応と思えない、少しばかりの熱が籠もつた息が漏れだしていた。アリサもその中の一人だつたことは幼馴染み達にさえ秘密のことだ。彼の薄く輝く蜂蜜色の髪と、見つめられれば誰でも素直にならざるを得ないような、翡翠の宝石のような光をたたえた瞳。

仲良くなれればいいなとアリサは、初対面の人間にに対して珍しく好意的な感情を抱いたものだつた。それは、アリサにとつて実に希

な感情だった。両家の息女として、彼女は同年代の少年少女とは違
い、滅多なことで他者を信頼しないようになってしまっていた。そ
んな自分が、一目見ただけでそんな感情を抱いてしまったというの
は、彼女にしてみればとても恥ずかしいことに思えたのだ。

しかし、彼女のその感情は、彼の視線が一人の少女に向けられた
とき、彼の表情が緊張から解き放たれるように開かれたときに終わ
りを告げた。その視線の先にいた少女　高町なのはも彼と同じよ
うな表情を浮かべていることが分かつたときに、アリサにとつてコ
ーノとは何となく気にくわない男子という感覚に一気にシフトして
しまった。心にそれは急転落下だつた。自分にこれほどまで激しく
揺れ動く感情があるとは、彼女も初めてのことだった。

そして、その後の自分の態度は、ある意味そのせいで平静を失つ
ていたことに原因があるのかもしれない、とアリサは友人の侍女ガ
入れた紅茶を口に含みながら思い返した。

この感情をなんと名付ければいいのだろうか。まるで、心がむき
出しにされたような、痛みを伴う感情を、アリサは名前を付けるこ
とが出来ずについた。名前を付ける事がどうじょうもなく怖くなつて
しまつた。

彼は、初めて会ったときから高町なのはの側にいて、まるでそこ
にいることが当たり前のような態度で、彼女の隣に居座つた。まる
でそれは、今まで自分がいたはずの場所を取られたような。自分自
身の心根を奪われたような、そんな不快な感情が決壊した堤防から
流れ出す濁流のように次から次へとわき上がってきた。

奇麗だと思った彼の声が、まるで媚びるような声に聞こえた。見
つめられれば心が解きほぐされるように思えた彼の瞳が、打算的な

悪意を隠すための嘘のように見えてしまった。

どうしてお前がそこにいるのか。どうして、誰にも断り無くそこに居座り続けるのか。

思えば、子供っぽい感情だったとアリサは思う。そして、自分にはまだそんな感情が息づいていることにアリサは驚きを感じていた。それはまるで、かつて気にくわないといつ理由でいじめていた、今は親友となった少女 月村すずかに對して抱いていた感情そのものではないかと彼女は思い至った。

(結局、私は何も変わらないだけなのかもね)

アリサはそう思いながら目を開き、バルコニーを覆うひさしの向こうに広がる、一面に澄み渡った冬の空を見上げた。いつまでたつても空は変わらない。もつ、何年も同じ空がそこには広がっている。しかし、今の自分たちはどこか、決定的に変わってしまったとアリサは予感している。

親友達から隠されていたことがあった。そして、おそらくはその原因を作った少年が、今日特別に時間を作つて、自分たちに会いに来る。

アリサは視線を空から下げ、目の前に座つて本に目を落とすすずかをチラリとうががつた。

彼女はどう思つてゐるのだろうか。彼女もまた、少年に願われていまここにいる。彼女も、自分と同様、聖者の夜にその決定的となる光景を目にしていた。彼女は、既に受け入れてしまつているのだろうか。彼女は、このテーブルに着いたときから一度も口を開こうとせず、ただ一冊の書物を読みふけるばかりだつた。

彼女が何を考え、そして、これからどうあらうとするのか。聞いてみたいと思った。しかし、聞くことが出来なかつた。それによつて、自分と彼女の間になにか決定的な差異が生じてしまう予感があ

つた。それが、今のアリサにとっては自分の心臓をつかみ取るほどにおそれる事だった。

「……来たみたいだよ……」

ふと、すずかは本より視線を上げて、読書の時にだけかけている眼鏡を外し、そっと机の上に置いた。

彼女はバルコニーの向こうへと目を向ける。その先にそびえる、月村の屋敷の門。その、鉄格子の向こう側に、ただ一人たたずむ少年の姿がアリサの網膜に飛び込んでき、彼女は思わず身体を硬くした。

「アリサちゃん」

はつきりとした声がアリサの鼓膜を震わせた。

「なに?」

随分と硬い声がアリサの口からはき出される。

「ユーノ君は、私たちの友達だよ。それだけは、見失わないでね」

すずかの言葉を聞いて、アリサは「ああ、そうか」と思い至った。結局は、彼女も同じだった。変わってしまうかもしれない自分たちの関係に、彼女もまた自分と同じような恐れを感じていたのだ。

「分かつてゐるわ。親友だから……ね」

故に、アリサもその言葉を自分の胸に刻み込んだ。どのような事が起こっても、どのようなことが彼

ユーノ・スクライアの口か

ら紡ぎ出されようとも、それだけはぶれないよつ」と。

「ユーノ様がおつきです」

アリサはバルコニーに顔を出してそう告げるすすかの侍女、フアリンの声に頷き、そして居住まいを正して彼を待つた。

到着した彼は随分と思い詰めた、追い詰められた表情をしていた。少なくともアリサにはそう思われた。

到着早々、本題を切り出しそうになったユーノを制して、すすかはフアリンに命じて、彼の為にお茶とお菓子を振る舞わせ、それが終わるまで何も話をしないと告げた。それは、強い感情が込められていた。

「お茶を飲むときま、お茶の話をしよう?」

思えば、すずかもまた、彼を目の前にして少し時間が欲しかったのかもしないとアリサは思った。改めて彼を目の前にしてわき上がる感情をそのままにしないように。落ち着ける時間が欲しいとアリサも思っていた。

「今日のお茶は、ダージリンのビンテージものよ。良く味わいなさい

時間かけてゆっくり味わえば、その分だけ心は平静を取り戻すだろうとアリサは願つた。しかし、それはおそらくかなわないだろうとも思つていた。なぜなら、彼が静かに頷いて、随分と堂に入った作法で紅茶を口に運ぶ姿を見るだけで、自分の感情がどんどん落ち着かない何かで満たされていくから、とてもこのまま落ち着いて話が出来るようになるとは思えなかつた。

「美味しい？」

穏やかに微笑むすずかに、ユーノはうなずき、「美味しいよ」と返した。

「すゞしく良い香りで、こんなに美味しいのを飲むのは初めてだよ」

そういうながら、ユーノはチラリとアリサの表情を伺つた。

「ふん！ 当たり前じゃない。ファリンは、お茶を入れるのだけは上手なんだから」

いつの間にか彼の仕草、一切拳動を目で追つてしまつていたことにアリサは気が付き、そう憎まれ口を叩きながら彼の視線から目を離した。すずかが自分を呆れた表情で見ている、その視線がアリサには痛いほど感じられた。

「アリサちゃん。そんなこと言つたら、ファリンに失礼でしょう？」

確かに、すずかの専属の侍女であるファリンは、まだまだ子供っぽく、未熟でドジな所がある。しかし、そんな風に見える彼女でも、月村の侍女でいられる程には優秀なのだ。

「分かつてゐるわよ、それぐらい」

どうして、自分は憎まれ口しか叩けないのだろうかとアリサは自分自身を殴つてやりたい衝動に駆られた。いつだって自分はこうだ、本当は素直になつた方がいいことなど昔から分かっている。どうしてこうなつてしまつたのか、アリサは何もままならない自分自身を

嘲笑するよつたな、憂いの籠もつたため息をまた漏らした。

溜息を吐けば幸せが逃げていくとはよく言われているが、幸いだと思えることの何もない今の現状から、どうすればこれ以上幸せが逃げていけるのだろうかとアリサは思つ。既にない幸いを、たぐり寄せることも戻すことも出来ないからこそ、人は諦観を込めて溜息を吐くのかもしれない。

「それにしても、クリスマス・イブ以来だよね。ユーノ君と会つのは

何となく話しづらそうな様子のアリサに助け船を出すよつにすずかがそう、ユーノに語りかけた。

「そうだね、色々あつたから」

ユーノはそう言つてカップに口をつけ、言葉を切る。いろいろあつたことは分かつてゐる、しかし、それがなんのかアリサはまだ知らない。なのはとフェイトも何も話そうとせず、結局年越しのイベントと新年の祝いを過ぎて、明日には新学期が始まつとしている所にようやくユーノから連絡が来たのだった。

クリスマスのあの日。闘争にまみれたあの夜以来、アリサとすずかは初めてユーノと会つことが出来た。

「その色々つていうの、そろそろ話して欲しいんだけど」

もう、アリサは我慢できなかつた。あの夜を越えて、なのはもフェイトも変わつてしまつた。会つたときから朗らかな笑みを浮かべて、日々の幸せをかみしめるよつに過ごしていたはずのフェイトが笑わなくなつた。そんなフェイトを見て、そして、隣にいないうー

ノを想つて笑顔を失つたのは、何が原因となつたのか、何を取り除けば一人は戻つてくるのか。結局、アリサは何も分かつていなかつた。

分からぬといふことが、たまらなく嫌だつた。

「うん。今日はそのつもりで來たから」

ユーノは一杯目の紅茶を一口に飲み干し、そして、それをソーサーにおいた。ふと彼の手元を見ると、カップを今だ摑み取る指が小刻みに震えている。

結局、同じだとアリサは思つた。結局、自分もすずかも、ユーノもここにいる善因が一つのことを恐れて聞くことを、いつことを躊躇している。

それは、そこまで自分は彼らを大切に思つてゐるのかといふことの証明でもあつた。

アリサは「クリと唾を飲み込んだ。空になつたカップにポットの中で少し冷めた紅茶を手酌で注ぎ、それをまたゆっくりと飲み始める。

何かを口にしていなければ、いらないことをいつてしまいそうだつた。

（あたしは、臆病だ）

アリサはそう思いながら、掲げたカップの向こう側のユーノをしつかりと田で捕らえ、首を縦に振つて促した。

「じゃあ、話すよ…………どこから話したらいいのかな……たぶん、始まりはいろいろあるんだろうけど、決定的だつたのは半年と少し前ぐらいになるのかな……」

そして、ユーノは語り始めた。それは、全てが決定的となつた時。ジユエルシードがこの街にばらまかれて、力不足だったユーノがやむを得ずにはに助けを求めてしまつたことから始められた。

そして、フェイトという一人の悲しい少女との出会い。相容れないかと思つたその少女に対し、なのはは粘り強く声をかけ続け、そして、最終的にはクロノやリンクティ達の助力を得ることで、なのははフェイトを助け出した。フェイトに関することはあまり深くは話されなかつた。家族で悲しいことがあつたということだけは事実だつたが、そればかりはユーノの口から話されることではない。しかし、フェイトはアリシアといつ姉を得て、幸せになるはずだつた。

しかし、その状況はそれから半年後、つい先日起きた事件によって覆されることになつた。

闇の書と呼ばれるものがあつた。それに魅入られた少女がいた。

「それがはやてちゃん?」

すずかの呟きにユーノは肯いた。どうして、すずかはそれに気が付いたのか。ユーノがそう聞くと、すずかは感情のこもらない表情を浮かべ、口を開いた。

「あの、空を飛んでた黒い女人から、何となくはやてちゃんらしい気配みたいなものを感じたから」

あのとつさにそこまで感じ取ることが出来たのはユーノにとつて驚きだつた。今まで気が付かなかつたが、ひょっとしたらすずかには魔法の才能があるのかもしれない。あるいは魔法以外の何か、レスキル的な要素が彼女にあるのかもしれないとユーノは思い、そ

れ以上の考察を打ち切った。今はそれが重要なのではない。

「続けて」

アリサの短い声にユーノは再度頷き、その事件のあらましを伝えた。はやては、闇の書に飲み込まれ、それと同時に近くにいたアリシアまでもが飲み込まれた。

フェイトも結局は同じように飲み込まれてしまうが、三人は結果的に助かった。どのようにして助かったのかは、随分複雑で説明することが出来なかつたが、三人は助かり、二人は無事に帰ってきた。ただ一人、アリシアを除いては。

「それが フェイトが笑わなくなつた理由？」

ユーノが唇をかみしめる様子をアリサは確かに感じ取ることができた。アリサとすずかは、はつきりと言えばアリシアとそれほどの交流はない。直接顔を合わせたのは、一月と少し前に行つたフェイトとアリシアの歓迎会のみ。そのときも、結局アリシアは自分たちの輪の中には加わらず、大人連中と談笑をしていただけだった。しかし、フェイトにとってアリシアとはただ一人の肉親だ。彼女がアリシアをいかに大切にしていたのかは確かめる必要もないことだった。

「アリシアちゃん、どういう様子？」

すずかの問いかけにユーノは首を振つた。それは、答えられないことか、それとも単に知らないだけのことか、あるいは、何一つ予測できない自体なのか。少なくとも命だけは無事だということだけを二人は聞かされた。

「じゃあ、もう一つだけ」「

アリサは黙つてすずかの声を聞いていた。すずかの瞳にはアリサの目から見ても良くない光が灯っているように思えた。しかし、アリサはすずかを止めなかつた。

「うん、なに?」

「なのははちやんがね、最近すゞへ辛そうにしてるんだ」

コーノは歯を食いしばつた。その様子にすずかは、やはりか、と理解した。

「心当たり、あるんだね?」

すずかの表情はとても研ぎ澄まされていた。答えなければ何をするか分からぬ。そんなことを思わせるような、冷たい表情に思えた。

「隠すつもりじやなかつたんだ。だけど、なんていえばいいのか、分からなくて」

コーノの表情に浮かんでいるのは、後悔の念だつた。フェイトとアリシアの話をしているときには、辛そうにしていても彼は決して表情を崩すことはなかつた。真剣にして冷静にただ事実を伝えるよつに彼は淡々と言葉を続けていた。しかし、彼女の名前が、高町なのはの名前が出たとたん、彼の表情はあっけなく崩された。彼の心根に深く息づく彼女の名前は彼からいぐらでも冷静を奪い去つてしまつ。たとえ、目の前に彼女がいなくても　いや、むしろ彼女がないからこそ、彼はその表情に感情を乗せることが出来るのか

もしけないとアリサは思った。

彼の心の奥深くに住まう彼女の名前を羨むべきなのか、それとも彼は決して彼女の前ではあらわさない感情を自分たちの前では表してくれることを喜ぶべきなのか。アリサは対立するその二つの感情をもててありますばかりで言葉を放てなかつた。

ユーノの話は、確かにまとまりに欠けるものだつた。彼は、ふとした理由で迷つた彼女を助けたいと思ったが、それも上手くいかず、形だけでも彼女を立ち直らせたクロノに僅かな妬みさえも抱いてしまつた。

しかし、ユーノはなのはを助けることが出来た。自分自身の魔導師の命とも言えるリンクアーコアを犠牲にして、ユーノはなのはを守ることが出来た。しかし、それはなのはの中に大きな傷をつけてしまつことになつた。

自分のせいでユーノが傷ついた。それは、彼女にとつて何よりも恐ろしいことだつただろうとすづかは胸を痛めた。

なのはは自分が傷つくことを厭わない。時には力を用いても誰かとわかり合おうとする気概も持ち合わせている。

「なのは、辛かつたでしょうね……」

アリサにはその情景がはつきりと見えた。暗い病室に眠るユーノを前にしてただうなだれるだけのなのはの姿が実感をもつてアリサの脳裏に浮かび上がる。

「僕は、守れたと思ってたんだ。傷も痛みも、なのはを守れた証みたいに思えて、誇らしかつた。こんな僕でも、なのはには助けてもらうことしかできなかつた僕でも、なのはを守れるって、そう思え

たんだ……」

「だけば、ユーノ君はなのはちゃんの心は守れなかつたんだね？」

すずかの言葉は余りにも容赦のないものだった。アリサはすずかにもつこれ以上はユーノを責めないよう言つべく口を開こうとするが、それはすずかの一瞥によつて封じられた。

(今は、私に任せて)

そんな声が聞こえた気がして、アリサは口を噤む。

「ねえ、ユーノ君」

「なに？ すずか」

ユーノは面を上げてすずかを見た。これ以上何を言われても、それをしつかりと受け入れる。彼の表情にはそんな覚悟が透けて見えて、アリサはそれを痛ましく思つた。
どうして彼はそこまで背負おつとするのか。

「私が言つのはこれが最後だよ」

「うん」

ユーノは頷き、すずかは「すう」と大きく息を吐き出した。

「 ありがとう」

透き通つた響きが空気を震わせた。

「えつ？」

それは、まるで祝福の風のように舞い降り、ユーノは目を見開いた。

冷たい、まるであらゆることを容赦なく切り刻まんばかりの表情をしていたすずかはその一言で表情を崩し、ゆっくりと穏やかな表情を作つていった。まるで、冬空に浮かんだ暖かな太陽のように。ユーノはその表情を見て、思わず涙を流しそうになつた。

「ありがとうございます、ユーノ君。ユーノ君がいてくれたお蔭で……なのはちゃんは無事だつた。ユーノ君がいてくれなかつたら、なのはちゃんだけじゃない、フェイトちゃんも、はやてちゃん達もどうなつてたか分からぬ。だから、貴方がいてくれて、私は嬉しい。ユーノ君が私たちの友達でいてくれて、私は本当によかつたと思つ」

「すずか……あんた……」

アリサは言葉を失つた。この友人は、いつたいどこまで懐が深いのか。すずかは、ただそのの一言だけでユーノのすべてを包み込んだのだ。ただ許しただけではない、許すも許さないもない。それらを含め、すべてを内包してすずかという人間がユーノ・スクライアという人間をすべて認めたのだ。

とてもまねが出来ない。自分ではその領域にたどり着くことなど不可能だとアリサは思つしかなかつた。

「私からは以上だよ」

まるで呆然としてただすずかに目を向けるしかなかつたユーノを一瞥し、すずかは「ふう」と何かから解放されたような吐息を一つ

いて、おもむろに席を立つた。

「すずか、どこ行くのよー?」

アリサもあわてて席を立つてすずかを追おつとするが、バルコニーの大窓に手をついたまま振り向いた彼女の視線を前にして足を止めた。

「ちよっとネ」ちゃん達の様子を見に行くだけだよ。アリサちゃんは、ユーノ君と待つてて」

ユーノが振り向くまでの瞬間に、すずかはアリサにほんの少し鋭い視線を投げかけた。

そして、去っていくすずかの後ろ姿をガラス越しに見守りながらアリサはその眼が語った事をまるで、念話の如くはつきりとした声で聞いていた。

『次は、アリサちゃんのばんだよ?』

結局、すべて彼女の手の内かとアリサは天井を仰いだ。すずかは自分の意志と言葉で筋を通した。しかし、自分はただそれを聞いていただけ。すずかの尻馬に乗つてそのままやむやに事を終わらせることが出来ない。彼女が許さなかつた、そしてそれは、何よりもアリサの矜持が許さないことだった。

(相変わらず、あたしのことよく分かつてゐるわね、すずか)

敗北宣言に近い思いを抱き、アリサは肩を落とし、心の内で両手を挙げた。

「あの……アリサ？」

背後からコニーの弱々しい声が響く。普段のアリサなら、「なによー?」と腰に手を当てながら振り向き、眉間にしわを寄せながら彼をにらみつけただろう。

実際はそんなことをしたくないのに、自分の意地っ張りな性格がそれをさせてしまつ。しかし、今は普段より幾分か落ち着いているようだ、いつもなら落ち着いてくれない胸中も一面に小波おなづなみが立つ程度には凧凧いしている様子だった。

「ちよっと…………散歩でもしまじょつか」

アリサはそいつて振り向いた。思った以上に落ち着いた声を出しことが出来た。そして、側に座つて、どこか居心地の悪そつこちらを見るコニーは、アリサの言葉にただ無言でうなずいた。

もう少しだけ考える時間が欲しい。

そう思いながらアリサはコニーを背後に従えるようにバルコニーから離れた。

* * * * *

月村の屋敷の周囲には庭にしては随分と広い林が広がっている。ほんの一、二年前には良くこの林で、なのはとすすかと共にネコを追いかけたり、ピクニックのようなことをしたり、秘密基地を見つけたりとよく遊んだものだとアリサは昔を懐かしむように緑の天蓋を見上げた。

町中にいながら、ここには俗世間的な喧噪が存在しない。まるで、

人の世から切り離された静かな世界のようだ。風が木立を吹き揺らし通り抜けていく感覚に身を預け、木の葉が揺れる響きに耳を傾ければ、心は否応なく落ち着いていく。

普段なら、足下にひなたぼっこをしながら昼寝をするのんきなネコの一匹や二匹はいるはずだが、今日に限って彼らはここにはない。今頃すずかがそのご機嫌取りをしているだろうと思いながら、アリサはふと木々の間に見える月村の屋敷の楼閣に目を向けた。

僅かに見える窓はすずかの部屋のものだとアリサは気がついた。彼女はいま、自分たちを眺めているのだろうかと思いながらアリサはそのまま振り向いて、背後で立ち止まり、どこか感慨深そうな表情で木漏れ日の注ぐ天上を見上げるコーノに目を向けた。

「何かあった？」

アリサも彼に習つて頭上を見上げるが、そこには代わりのない緑の覆いが広げられているだけで、何か物珍しいものがありそうにもなかつた。

「うん……何かって言うんじゃなくて……ここで、なのほど僕はフェイト出会ったんだなって思つて」

昔を懐かしむほどの時間は過ぎていない。しかし、今を思うとあの時は余りにも遠くて、コーノはどこか眩しそうにそれを見つめ続ける。

「そつか……ここだつたんだ」

それなら、フェイトことつて思い出の場所となるのだろうとアリサは感じた。そして同時に、なのはとコーノにとつてもこことは、一種特別な場所になるのかもしれない。

「春ぐらじになのはがっこで木から降りられなくなつた子猫を助けて、自分も一緒に落ちたつて」ことがあつたよね。そのときだよ」

「あ～、あの時か……なるほど、おかしいと思つてたわ。運動音痴なあの子が、いくら正義感が強いからつて、いきなり木に登るなんて出来るはずないつて。すずかも不思議がつてた」

「うん、隠して」とめん

「やうするとい、なのはが追つてたフュレットのコーノつて……ひょつとして……」

「うん、僕だつたんだよ」

「やうだつたんだ、動物にしては賢くやると思つたわ

「じめん」

「別に、あたしもやんざつじつ回しちゃつたから、むしろあたしが謝るべきね」

フュレットのコーノと今、田の前にいるコーノ。その一つと一緒に考えるのは、随分と無理があつたが、言われてみればコーノの体毛はこのコーノと余りにもにいて、その瞳の光や、その仕草もどことなく重ね合わせることが出来るように思えた。

アリサはそれで色々と納得することが出来るような気がした。人の姿をしたコーノと交流を深めていくうちに何故か、もっと前にも会つたような気がしていたのだ。

やう考へると、あの時の自分はコーノをペット扱いしていたと言

うことかとアリサは考え、何となく申し訳ない気もしていた。自分も犬猫のように扱われるのは、犬や猫には悪いが、冗談ではないと思ってしまうからだ。何よりもペットフードを毎日食べるなど、飼い主に反逆しても拒否するだろう。それを彼は一月以上もその状況を続けていたというのだ。

いや、まあ、あんたも結構大変だったのよね」

「分かってくれるとありがたいよ」

「あんた、その間になのはに変な」としてないでしょ？ とい
うより、あんたの方がなのはに変な」とされてた可能性もあるのか
……」

「えっと、そのあたりはノーロメントで……」

「ふん、まあいいわ。その内吐いてもらつから」

ユーノの苦笑いでアリサは、二人の間にそう言つこともあつたのだろうと殆ど断定した。実際はどれもこれも幼い子供の微笑ましいやり取りのに近いものであるのだが、それを出汁にしてユーノをからかつてやるのは、アリサにとつて、とても面白いとのよつに思えた。

実際、それ以外に彼女はユーノとの付き合い方を知らない。

(よく考えたら、みんなかりいじめっ子ね、あたし)

なぜ、いつもユーノを弄りたくなるのか、それはアリサにも分からぬことだが、なぜか、彼とはこうしているときが一番楽しく感じてしまう。

「言わなきゃいけないことは、すずかが全部言つたから。私からは
もへ、何もこいつとはないわ」

重要なこと、確かめなければいけないと既にアリサは聞いて
いる。なのないこと、フロイトのこと。多くは納得の出来ないこと
もあり、それらが自分の手の届かないことで行われて、聞かされる
のが結果だけであることに對しては氣に入らないと思つこともある。

「うん」

コーノはしつかりと肯いた。それは、背負つている表情だとアリ
サは思った。おそらく、この少年は、誰に言われなくとも、これか
らもなのはとフロイトを背負つていこうと思つてているのだろうとア
リサは理解した。それは、果たして彼が背負つべきものなのか。自
分が負担できる所はないのか。それは、今の課題ではない。

「当然、納得できないこともあるし。あんたが、なのはを落ち込ま
せてるつていることも、正直許せないって思つ所もある」

「「うん」

「あたしに謝つてもなんにもならないわ。それでなのはとフロイト
が立ち直るなんてことないんだし」

「うん、「うん……」

「まつたく、あんたは…………あたしの友達だつたら、まつヒシャ
ンとしなさこよね」

その言葉は自然に紡ぎ出すことが出来た。どうすれば、自分の考えが伝えられるのか。どうすれば、すずかのように心からの言葉を素直に綺麗に口にすることができるのか。

先ほどまで悩んでいたことが莫迦らしくなるよつて思えた。

そして、アリサが見つめるコーソは、自分が何を言われたのか分からず、ただ呆然とアリサの目を見つめていた。綺麗な翠の瞳がまん丸に見開かれて、その瞳にはつきひとつアリサの姿が映し出されている。

「アリサは、僕が友達で良いの？ だって、僕はずっとアリサ達を騙してたんだよ？」

騙していたなど、言葉が大げさではないだろうかとアリサは思つた。騙していたと言うよりは言えなかつたと表現した方が、何となくだが適切に思える。

確かに、内緒にされていたことは癪に思えるが、それで関係が終わるになるようであれば、それは果たして本当の友達といえるのかどうかとアリサは思う。

「それで友達じゃないんだつたら、なのはとフレイトも友達じゃなくなっちゃうじゃない。あたしはそんなの嫌。だから、あたしはあんたと……コーソと友達でいたい。ダメ？」

「ダメなんて……そんなはず無いよ。嬉しい、とても、嬉しいよ……」

…

「なのはのこともフレイトのことも、これからみんなで何とかしていきましょう。はやても巻き込んで、すずかにも助けてもらつてね。コーソは一人じゃない。それだけは忘れないで」

「ありがとう、アリサ。これからもよろしく」

「友達としてね。よろしく、コーノ」

アリサとコーノは手を握り合い、お互に少し恥ずかしそうにしながらも笑顔を向け合った。

おそらく自分たちは上手くやつていけるだろう。時間はかかるかもしれないが、諦めなければどうにでもなるはずだ。それはアリサの確信だった。そうならなければおかしいと思えるほど、アリサの表情には迷いがなかつた。

なのは達は戦い続けてきた。おそらくコーノとフロイトはこれからも戦い続けるのだろう。それを止めることはおそらく自分では出来ないだろう。しかし、これからも自分にとっての戦いが始まるのだとアリサは心を燃やした。

相手はひどく強くて手強い。何せ人の心を相手にするのだから、100の強者を相手にするよりもなお困難な道だろう。

(あたしは、負けない。絶対に負けないから……)

力を込めて握りしめるコーノの手から伝わる温もりが、心強く思えて、アリサは身体の芯から湧き上がつてくる熱を一身に受け、高鳴る心臓の鼓動に身をゆだねた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9951o/>

After The Midnight Phase (Nameless Ghost NML外伝)

2010年11月19日06時13分発行